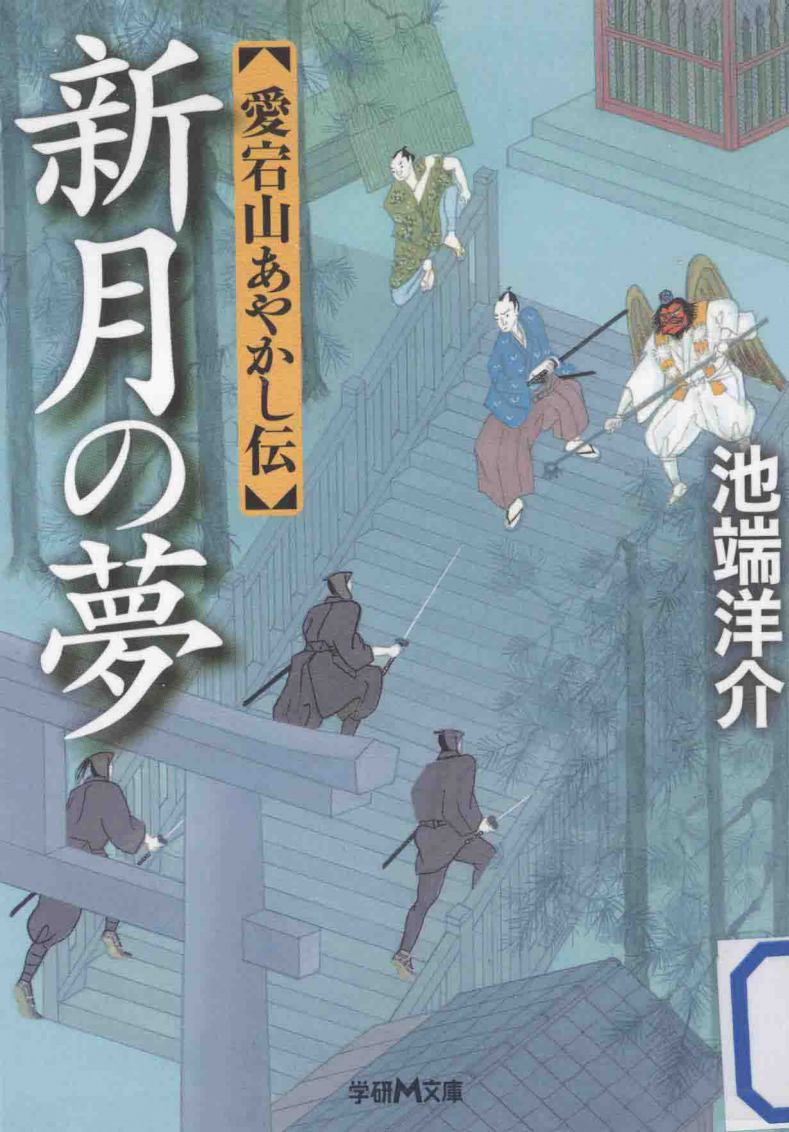
【愛宕山あやかし伝】
新月の夢
池端洋介
学研M文庫

斤月の夢

愛宕山(あたごやま)あやかし伝

常州大学図書館
藏書章

池端　洋介

学研M文庫

新月の夢　愛宕山あやかし伝

池端　洋介

学研M文庫

2013年4月23日　初版発行

●

発行人――脇谷典利

発行所――株式会社　学研パブリッシング

〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8

発売元――株式会社　学研マーケティング

〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本 ―中央精版印刷株式会社

© Yosuke Ikehata 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。
★この本に関するお問い合わせは次のところへ。
・編集内容に関することは――編集部直通　Tel 03-6431-1511
・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは――
販売部直通　Tel 03-6431-1201
・文書は、〒141-8418　東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『愛宕山あやかし伝』係
★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002（学研お客様センター）
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。
複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。
日本複製権センター　TEL 03-3401-2382
http://www.jrrc.or.jp　E-mail：jrrc_info@jrrc.or.jp
Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉

い-14-5

目次

序　5
第一章　愛宕山の三人　26
第二章　紅蓮の炎　104
第三章　猿の恩返し　209

斤月の夢

愛宕山(あたごやま)あやかし伝

池端　洋介

学研M文庫

完整PDF

目次

序　5
第一章　愛宕山の三人　26
第二章　紅蓮の炎　104
第三章　猿の恩返し　209

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

序

「お前には……天狗の血が……流れて……おる」
「は？」
それが父の最期の言葉だった。
「ご冗談を……」
そう言ってはみたものの、父が目を開くことは二度となかった。
京之介はただ呆然と、布団の脇に座り込んでいた。
（天狗……）
怪力乱神を語らず――こよなく論語を愛した父が、めったに口にするような言葉ではない。
（天狗？）
父を失った悲しみもどこへやら、京之介はなんどもその言葉をつぶやくばか

りだった。
ふと気がついてみると、父の布団の胸もとに、一通の書状が載せられている。
（なんだ？　小遣いか？）
その時、
「京之介さま。もし。京之介さま」
いつまでたっても動きのない座敷の様子に異変を感じたのだろう。用人の田村三右衛門が、廊下から幾度となく、京之介の名を呼んでいたのである。
（天狗だと？）
「失礼しますぞ」
三右衛門が障子を開けて部屋の中をのぞき込んだと思ったとたん、
「あっ」
飛び跳ねるように体を起こし、
「幸庵どの、幸庵どのはどこにおられる！　殿が……殿が一大事でござる！　奥さま！　真之介さま！　貞次郎さま！」
どたどたと廊下を駆けて、別室で待機しているはずの医者を呼びに行ってしまった。

（相変わらず騒々しい奴だな。しかしそれにしても、なんだというんだ。天狗とは……）

京之介はぶつぶつ言いながら、無意識のうちにその書状を懐に押し込んでいた。

その動作と入れ替わるようにして、別室の母と、嫡男次兄とが、青い顔をして飛び込んできた。

「京之介、父上は……」

長男の真之介が、わかりきったことを尋ねた。

京之介が黙っていると、

「ああっ！　とうとうこんなお姿に……」

母が泣き崩れるように、父の亡骸にとりついた。

「母上。お気を確かに」

両手に顔を埋めてすすり泣く母の背中を、次男の貞次郎がさすり始めた。

（わざとらしい。ちょっと静かにしててくれんか）

「父上は……父上はたった今亡くなったのか」

真之介が問うた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「うーん……」

そう言えば大昔、京之介がまだ物心ついたばかりのころ、天狗の面を買ってくれたことがあったなと、突然思い出した。

「おい、京之介。聞いておるのか」

「そうそう」

「そうそうって……なんという言葉遣いだ」

真之介が叱りつけるような声で言ったが、末弟である京之介には通じなかったようである。

そうそう、どこかの神社の参道の露店で、狐だのひょっとこだのの面と混じって、赤い天狗の面があったような気がする。となりには同じような顔をした緑色のもあって、こっちはなんだと父に尋ねると、

緑のは河童だと言っていたな……うん。間違いない。

「間違いない」

「たったいま亡くなったことに、間違いはないというのだな」

なんだか河童の方が可愛げがあったので、そっちが欲しいと言ったら、河童は縁起が悪い。赤い方でなければ買ってやらんぞとも言っていた。

「それで……父上は最期になにかおっしゃっていたか」
「駄目だ。買ってやらんぞ」
「えっ！　そう言ったのか。父上が？　京之介、おい。確かだな？」
しかしなぜ天狗ならよくて、河童では駄目だったのだろう。京之介は子供心に不可解な思いを抱いたような記憶がある。
「母上……やはり父上は、嫁の着物の新調など許さぬということですな」
真之介は落胆したように腰を落とした。
「そんな馬鹿なことが……確かにお殿さまは最初、そのようにおっしゃっておられましたが、志摩どのの家の特段の事情を考えればやむをえないだろうと、お考えをお改めになったのです。わたくしがこの耳で」
母は自分の耳たぶをぐいと引っ張りながら、
「間違いなく聞いたのですから」
とことさら強調して見せた。
「お殿さまの喪が明けてほどなく祝言を挙げるとするなら、もう一年しかないのですよ。家督相続や祝言については、わたくしの実家の者が手を回して内々に許しを得たからいいものの、その間に着物からなにから、嫁入り道具をす

べて当家でそろえてやるのに、ゆったりとかまえている暇などないのです。真之介、貴方だってその辺りは十分承知しておいででしょう」

顔を上げた母が、先ほどまでのすすり泣きはどこへやら、毅然(きぜん)とした口調で言った。

「はあ」

真之介は苦り切った顔で答えたが、責任のすべては志摩にひと目ぼれした自分にあるのだから、口答えなどできる立場にはない。

志摩というのは、真之介に嫁(とつ)いでくることになった嫁の名であり、特段の事情というのは、志摩の実家である坂上(さかがみ)家にほとんど金がないということを意味した。それどころか、延ばしに延ばしていた借金返済が、いよいよ一刻の猶予(ゆうよ)も許されない深刻な事態となっていたのである。

志摩が十歳になるかならぬかの頃、父親が急の病でこの世を去ったのであるが、後に残されたのは借金の山だった。

このため関わり合いになるのを嫌った親族から援助の手が差し伸べられることはなく、もともと貧乏だった坂上家はますます困窮の度を増し、その日の食べ物にも事欠くありさまで、定められた人数の若党や中間(ちゅうげん)を雇い入れる余裕な

ど、どこにもなかった。

葬式に集まってきた友人や親戚などの話をまとめれば、死んだ坂上家の当主はなんとか窮状を打開しようと、外聞をはばかるような商売に手を染めていたのではないかというのである。しかしその外聞をはばかるような商売というのが、いったいなにを指しているのかについては、ついぞわからず仕舞いだった。

「こうなったら仕方ありません」

母親はぴしりと背筋を伸ばし、

「いちどかいた恥です。実家の弟にまた頭を下げて、金子（きんす）を融通（ゆうずう）してもらうほかありません」

と、仕方なさそうに吐息をついた。

「しかし、わたくしがこの家と財産を継ぐのですから……父上も祝言の件については同意なされていたというならなおさらです。この家の財産は……」

真之介が言いかけると、

「なにを戯（たわ）けたことを。あなたの家督相続の願いが藩に聞き入れられてからでは、遅いのです。嫁入り道具をそろえるのには、それなりの時間が必要なのですよ」

と言葉をさえぎり、

「それにまだわかっておられないようですが、家督相続もせぬうちに、しかも喪の最中に、着物だの箪笥だの注文してごらんなさい。人さまがなんと言うかわかったものではありません。『あの家はこともあろうに、当主が死ぬのを待っていたとばかりに買い物を始めた』とあらぬ噂をたてられるに決まってるじゃありませんか」

と眉をしかめ、

「まったく殿も、どうせ長くないのなら、買い物をぜんぶ済ませてからお亡くなりになってくだされば よろしかったものを」

とまで言ってのけた。

しかもそれだけでは気が収まらなかったとみえ、

「貧乏旗本との祝言などなければ、死亡届を遅らせて、しばらく家禄を元通り頂戴しておくことだってできたのに」

着物一枚買っていただくのも大変だったというのが口癖の母の鬱憤が、父の死んだその日に爆発したらしい。

そんな母親が急に口をつぐんで、再びすすり泣きを始めたと思ったとたん、

幸庵という出入りの医者が部屋に入ってきた。

幸庵は、慎重にも慎重を期し、ずいぶんと長い間、父の手首をとって脈をはかっていた。

腕組みをしたまま天井をにらむ嫡男と次男。

廊下の向こうから、通夜の準備で大わらわの年老いた用人やら下男下女やらの気配が伝わってくる。

「残念ですが、すでに息をお引き取りに」

幸庵はそう言うと、脈をとっていた父の腕を布団の中に戻し、一礼して部屋を後にした。昨夜急ぎの使いに呼ばれてから、一睡もしていないのであろう。目を真っ赤に腫らしながら、これでようやく帰れるという安堵の気配が感じられた。

ひたすらぶんむくれているのは京之介ひとりだった。

いったいなんだというのだ。天狗って、京の都の鞍馬山（くらまやま）で、あの義経に剣法を教えた天狗のことだとでも言うのか？

「馬鹿馬鹿しい」

「ま！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton